

2 平城宮と京の庭園遺跡における園池と建物

当該地における一連の調査では、A調査区で池SG 980の東岸とおぼしき落ち込みが検出されたにすぎない。しかしその折の出土遺物から、池が奈良時代から存続したものであることが推定されるとともに、H・I調査区で検出された遺構も、池と一体的な構成のもとに作られたものであることが判明した。ここでは平城宮と京およびその周辺で調査された庭園遺跡をあげ、若干の考察を行っておきたい。庭園遺跡については、平城宮第126次調査の調査報告書のなかで、「平城宮と京の庭園遺跡」として考察がなされている^{註1}。そのなかでは、まず当時発見されていた庭園遺跡9ヶ所をあげ、大きく山麓に位置するものと、平地部に位置するものとにわけると、さらに山麓部に位置するものは、湧泉を水源とするものと、谷筋を堤でせきとめて溜池とするものの2つに分ける。平地部に位置するものは、新たに池を掘削するものと、既存の湿地、旧河床、古墳周濠を利用するものの2つに分ける。そしてこれら奈良時代の庭園遺跡に共通する点として、1. いずれも水深50cm未満の浅い池である。2. 3～10度の緩やかな傾斜の洲浜石敷を有する。3. 汀線が蛇行する曲線である。4. 園池に近接した位置に建物が建つ。ことを指摘している。今回はこうした研究をふまえて園池と建物との関係について考えてみたい。

A. 園池と建物 これまでに確認された奈良時代の庭園遺跡は、11ヶ所に及ぶが(tab. 11)、園池と建物遺構の全体像が明らかになっているものは、平城宮東院と、左京三条二坊六坪の2ヶ所にすぎない。ほかに園池と建物遺構のそれぞれ一部を検出しているものに今回の調査地をはじめとして、左京一条三坊十五坪、左京三条一坊十四坪および白毫寺遺跡がある。以上の6ヶ所について園池と建物の関係を比較検討するために、これらの平面図を同一縮尺として並べたのがfig. 32である。残る5ヶ所の庭園遺跡については、以下の理由で今回は考察の対象にしなかった。佐紀池・平城宮北辺地域・法華寺は園池の一部を確認しているのみで、園池に伴う建物遺構が見つかっていない。平城宮大膳職地区は素掘りの不整形の凹みであり、護岸・景石もなく園池と考えるには疑問点が多い。また左京二条二坊十二坪は現在隣接地を発掘調査中であり、未報告である。上記6ヶ所それぞれについて園池と建物の関係を見ていこう。

平城宮東院 平城宮で検出された庭園遺跡は東院東南隅に位置し、東面と南面は宮の大垣によって区画される。遺構は大きくA・Bの二時期にわかれる。園池自体も護岸などに若干の改修がみられる。A期には玉石敷きの園池の北と西を掘立柱塀SA 9060、9061、9287がかこみ、園池の北に東西棟掘立柱建物SB 9067、園池の西に東西棟礎石建物SB 8480の2棟が建てられる。また園池の北に園路と考えられる石敷SX 9043、9099がある。

B期になると園池は全面的に造り替えられ、池底および護岸は礫敷きとなり、汀線の入りも大きくなる。また北岸には石組みの築山が、池南部には中島が築かれる。北を画し

ていた掘立柱塀は南へ約11m移動し、園池北側部分はせばめられるが、西の掘立柱塀は同じ位置で改築が行なわれる。西には東西棟掘立柱建物SB 8470と棧敷状施設SB 8471、その南に柱囲いSA 8467、8468と棧敷状施設SB 8466が建てられる。SB 8470の東2間分と棧敷状施設は池の中に建ち、さらにSB 8466からは東岸との間には渡廊SC 8465がかかる。園池の北には東西棟掘立柱建物SB 9077、9081が建てられ、園池の南には東西棟掘立柱建物SB 5870、八角楼SB 5880が建つ。また園池の東北部には橋SX 8453がかけられる。B期にいたって、園池周辺での造作が進み、園池へ張り出す建物が多くなることに特徴がある。

左京三条二坊六坪 左京三条二坊六坪（以下三条二坊と略す）も大きくA期、B期の2時期に分けられる。A期は坪の中心部に作られた園池を囲む形で、70尺の等距離に東西南北の4掘立柱塀が建てられる。園池の西には南北棟掘立柱建物SB 1470、1505、1510の3棟が建てられる。このうちSB 1470と1505はともに園池周辺の礫敷に接して建ち並び、東院の園池西側に建つ建物と類似した位置を占めている。

B期には北のSA 1500は存続するが、西と南の塀が取り払われ、東の塀はSA 1483に改作される。園池と一体となる区域がやや拡大される。園池の西には南北棟掘立柱建物SB 1471、1472、南北棟礎石建物1540の3棟の建物が建てられる。園池からの距離はSB 1471と1472が約10m、SB 1540は約18mとA期の各建物に比べて、やや園池から後退した位置を占めるようになる。

この2例の庭園遺跡では、まず園池の周囲を掘立柱塀で囲み、園池と一体として利用される空間を限定している。その広さは、東院では東西65m、南北94～105m、面積約6100～6800㎡であり、三条二坊は東西41～46m、南北41m、面積約1700㎡である。また東院B

	遺 跡	規 模 (m)			意 匠	参 考 文 献
		南北	東西	水深		
1	右京一条北辺四坊六坪	18	55	0.2	中島、北西隅に涌泉、地山を掘り込む	本報告
2	平 城 宮 東 院	60	60	0.4	景石、中島	『年報』1968, 1977, 1979, 1980
3	左京三条二坊六坪	55	15	0.25	全面石敷、洲浜、庭石	『平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報』1976, 1980
4	左京三条一坊十四坪	10	5+	0.25	玉石で護岸した中島	『年報』1968
5	左京一条三坊十五坪	10+	20+	0.2～0.3	平塚2号墳前方部の葺石を利用した洲浜、景石	『平城報告』VI 1974
6	白 毫 寺 遺 跡				護岸、景石、石組の泉水	『奈良県遺跡調査概報』1982
7	佐 紀 池	240	150+	0.5	幅2mの石敷洲浜	『年報』1976, 1977
8	平城宮大膳職地区	17	18	0.8	整地土を掘り込む	『平城報告』II 1962
9	平城宮北辺地域	16		0.6	市庭古墳外堤の葺石を幅3mの洲浜とする	『平城宮北辺地域発掘調査報告』1981
10	法 華 寺	10	30+		礫敷の護岸、洲浜	『55年・57年平城概報』1981, 1983
11	左京二条二坊十二坪	10	8	0.3	景石、玉石による護岸	『奈良県観光』第321号

本表の作成にあたっては、『平城宮北辺地域発掘調査報告』1981を参考にした。

略記 『年報』=『奈良国立文化財研究所年報』、『□年平城概報』=『昭和□年度平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
『平城報告』=『平城宮跡発掘調査報告書』

tab 11 平城宮と京および周辺の庭園遺跡

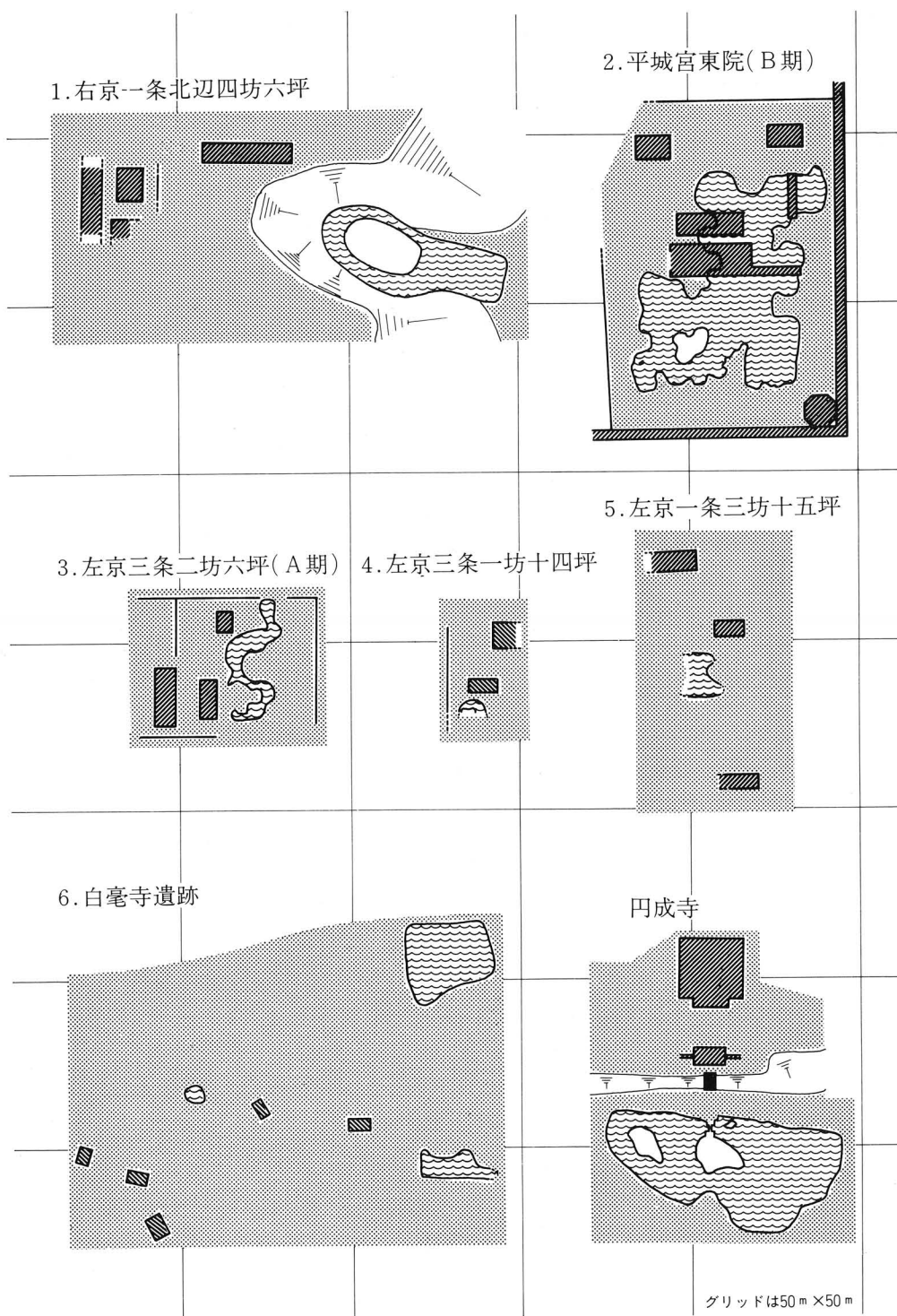


fig. 32 奈良時代庭園比較図

期のSB 5870、8470、8471、8466や三条二坊A期のSB 1505のように、建物の一部が園池へ張り出す建物が見られ、文献にあらわれる池台、池亭のような性格が推定されている。^{註2} 園池を周囲から観賞するだけでなく、園池水面を利用して何らかの行事を行なう、より直接的な園池の利用が推定される。そこには奈良時代の文献にしばしば見える曲水宴との関連がうかがわれる。遺構の上からも東院園池南側のSD 5856は、従来から曲水宴との関連が指摘されている。三条二坊の園池SG 1504も平面形や水勾配から考えて、やはり曲水宴に使用されたものと考えられている。

左京一条三坊十五坪 南北2町分を占めると推定される宅地の東半部を発掘し、古墳の周濠を利用した園池と、園池の北側に東西棟掘立柱建物SB 480、510、南側にSB 530の3棟の建物を検出した。SB 510と530はいずれも園池から約10m、SB 480は約40m離れて建つ。これらの建物群は宅地内の東半部を構成する協殿的な建物と推定されている。

左京三条一坊十四坪 十四坪の西側3分の1を発掘し、発掘区南端で園池北端部を検出した。園池の西2mには西側の小路に面する築地塀があり、検出された部分が園池の西端部であることがわかる。またこの園池は南の未発掘地にのびており、十三坪に及ぶ可能性が高く、二つの坪が一連の宅地であった可能性がある。築地塀内側で24棟の建物を検出し、5～6時期の建て替えが行なわれていることが判明した。底付きの建物や倉があり、園池を伴った上級貴族の邸宅跡と推定されている。園池に近い建物としては、園池北側に重複する4棟の東西棟掘立柱建物がある。いずれも園池から10m以内にあり、園池と一体の建物であろう。

白毫寺遺跡 白毫寺遺跡は谷を利用して作られた石組み護岸をもつ園池と、そこからのびる大形の溝や、石組みのある泉水的な施設が検出されている。周辺には小規模な掘立柱建物が5棟点在しているが、配置の上からは園池との有機的な関係はうかがえない。しかしこの遺跡については、立地・出土遺物等から聖武天皇の高円離宮の可能性を説く考えもある。春日山西麓部にあり、外京の諸大寺をはじめとする西方への眺望が開けている。

B. 右京一条北辺四坊六坪の庭園遺跡 園池と建物との関係が明らかである東院、三条二坊、左京一条三坊十五坪、左京三条一坊十四坪の4ヶ所の庭園遺跡と、右京一条北辺四坊六坪の庭園遺跡（以下北辺四坊と略す）とを比較すると、まず立地の点で前4者が平地であるのに対し、後者が丘陵地であるという基本的な相異がある。北辺四坊の宅地としての広がりや、占地の項で見たように、三坪と六坪の東西2坪と仮定すると、三坪は園池の一部と、園池東側に広がる平地であり、六坪は園池の大部分とこれをコの字形に取り囲む丘陵部となっている。そして園池は谷部にあり、H・I調査区の一連の遺構は、丘陵上に位置するから、両者の間には、約6mの比高差が生じている。これに対して平地部に立地する前者では、当然のことではあるが、園池と建物は同一レベルで存在する。また平面的に見ても、前者では園池と建物が近接し、なかには池中に張り出すものもあるのに対

し、北辺四坊ではSB 1000が約20m、他は約50mも離れた位置にある。今回の調査地における最大の建物であるSB 1000の南面中央からの園池の見え方を検討するために、現況の地形図をもとに書き起した断面図がfig. 33である。園池西側の傾斜地、及び中島に植えられていたであろう樹木を考慮に入れると、SB 1000からは園池を望み得ないことがわかる。西方の建物SB 1095、1100などからはまったく見えない。他の庭園遺跡における建物のあり方からして、北辺四坊でもさらに園池に近い丘陵上ないし傾斜面、あるいは園池東の平坦部に園池により直接的に関与する建物が想定できる。これらのことからH・I調査区における一連の建物の性格として、脇殿あるいは後殿といった位置付けが可能であろう。

次に北辺四坊では丘陵上に建物が建ち、一段低い谷部に園池を築造するという敷地利用がなされているが、この種の敷地利用は白毫寺遺跡に共通性を見い出せる。ただ残念なことに白毫寺遺跡では前掲のごとく園池と建物の関係が明らかになっていない。やや年代が下るが、これと良く似た敷地利用を行なっている庭園遺構に奈良市東郊の円成寺^{註3}があげられる (fig. 32)。円成寺は平安時代の所謂浄土式庭園として著名であるが、ここでは本堂以下の主要伽藍が丘陵南面の台地上にあり、下方に谷の湧水を利用して作られた園池がある。園池には伽藍中軸線に沿って南岸から中島を経て北岸へと2基の橋が架かる。橋を渡った北岸からは上部の台地へ登る石段がつづき、石段を登りきったところに楼門が建つ。楼門の建つ台地と下方の園池との比高は約4mを測る。楼門に立てば下方の園池は一望のもとに見渡せる。このような構成は庭園としては希な部類に属すが、こうした構成がすでに奈良時代に行われていたことを今回の庭園遺跡は実証した。また、この種の通常の宅地には見られない特殊な敷地利用がなされた遺跡の性格として、別業ないし離宮的な施設を考えたい。別業・離宮というと京外に求めるのが通例であろうが、北辺四坊の地が自然環境に恵まれた別業・離宮を営なむにたる地域であったという想定は、北辺四坊の当時における開発状況として設定できよう。

以上のように今回調査したH・I調査区の遺構について、他の庭園遺跡と比較しながら脇殿あるいは後殿的な施設と推定するとともに、園池を含む敷地全体について立地・敷地利用の特殊性から別業ないし離宮的な性格を考えてみた。しかしながら、この種の遺跡の調査事例が少ない現段階では、これも推定の域をでない。文献の記載によれば、平城京周辺には離宮や個人の別業が数多く営まれていたことがうかがわれる (tab. 12)。そうした遺跡の調査例の増加が望まれるとともに、周辺の開発が進んでいる当遺跡周辺に残された空地の保存と、計画的な調査の必要性が痛感される。

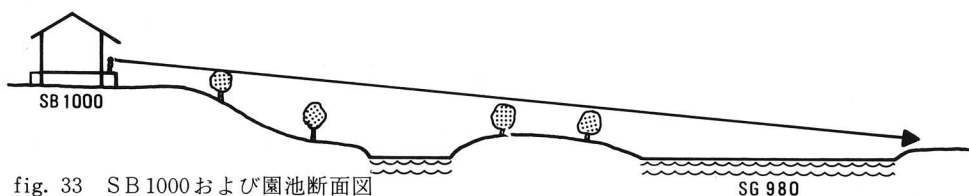


fig. 33 SB 1000および園池断面図

- 註1 田中哲雄「平城京と宮の庭園遺跡」(『平城宮北辺地域発掘調査報告書』1981) P. 17～19
 2 奈良国立文化財研究所『平城京左京三条二坊六坪発掘調査概報』1976 P. 12
 3 森蘊「円成寺の庭園」(『奈良市史 建築編』1974) P. 469～475

宮 名	存 続 期 間	比 定 地	典 拠	備 考
岡 田 離 宮	和銅元.9	京都府加茂町 大字北、山田	統紀和銅元.9. 庚辰条	
春 日 離 宮	和銅元.9～ 天平宝字頃には荒廃	奈良県奈良市 白豪寺町	統紀和銅元.9. 己酉条 万葉集4506～4510	=高円離宮
倉 橋 離 宮	慶雲2.3	奈良県桜井市倉橋	統紀慶雲 2.3癸未条	
竹 原 井 離 宮	養老元2～宝龜2.2	大阪府柏原市高井田	統紀 万葉集4457～4459	行宮、頓宮 =河内離宮 =和泉宮
智努(珍努)離宮	靈龜2.3(造営か)～ 天平宝字6.3	大阪府泉佐野市中村	統紀 大日古2, 3, 5, 10, 12	
二 槻 離 宮	大宝2.3(繕治)		統紀大宝2.3.甲申条	齊明朝より存在
保 良 離 宮	天平宝字3.11 (造営開始)～6.5	滋賀県大津市国分	統紀、大日古4	
襲 原 離 宮	和銅6.6～天平14.8	京都府加茂町瓶原	統紀	
吉野(芳野)離宮	文武4.8～天平8.6	奈良県吉野町宮滝	統紀、万葉集907～916 920～927, 1005～1006	天武朝以前より 存在
紫 香 樂 離 宮	天平14.8～17.5	滋賀県信楽町黄瀬	統紀、大日古2	
玉 津 島 離 宮	神龜元.10(造営)	和歌山県和歌山市 和歌浦中	統紀神龜元.10 戊戌条	
鮑 波 宮	神護景雲元.4～3.10	奈良県斑鳩町法隆寺	統紀	
石 原 宮	天平14.8～15.7	京都府加茂町河原	統紀	
大 郡 宮	天平勝宝元10～2.7	大阪府大阪市東区	統紀、大日古11	孝徳朝より存在
小 治 田 宮	天平宝字4. 8～ 天平神護元.10	奈良県明日香村豊浦	統紀	推古朝より存在
新 城 宮	宝龜5.8	奈良県大和郡山市 新木町	統紀宝龜5.8己丑条	
松 本 宮	天平勝宝4.4		大日古2、平概15	
大 原 宮	天平15.12		大日古11	
大 島 宮	天平6.5～ 天平勝宝2.3	奈良県明日香村島庄	大日古1, 2, 3, 9, 25	
梨 原 宮	天平勝宝元.12	奈良県大和郡山市 と奈良市法華寺町	統紀天平勝宝元.12.戊 寅条	
薬 師 寺 宮	天平勝宝元. 閏.5～ 2.2	奈良県奈良市七条町	統紀	
楊 梅 宮	宝龜3.12～8.6	奈良県奈良市 法華寺町	統紀	
薬 園 宮	天平勝宝元. 11～ 2.正	奈良県大和郡山市 北郡山町	統紀、長徳4年諸国諸 庄田地目録	=南薬園新宮
由 義 宮	神護景雲3.10～ 宝龜元.4	大阪府八尾市別宮	統紀	
田 村 宮	天平宝字元.5～ 延暦元11	奈良県奈良市三条町	統紀	
勅 旨 宮	延暦元.7		統紀延暦元.7戊申条	

典拠欄略号 統紀=統日本紀、大日古2=大日本古文書第2巻、平概15=平城宮発掘調査出土土木簡概報15

tab 12 奈良時代の離宮一覧